

国立大学附置研究所・センター会議
第3部会（人文・社会科学系）シンポジウム

感染症と近代社会

―ポスト・パンデミックの人文文学にむけて

シンポジウム概要

新型コロナウイルスによるパンデミックは予想を超えて長引いていますが、一方で我々はすでにパンデミックを所与の条件として社会生活を送る状況に、多かれ少なかれ適応し始めています。しかしそのような適応は決して容易いものでもスムーズに進むものでもありません。パンデミックがもたらす様々な物理的・社会的制約の中で、我々は今後どのように生きていけばいいのか。その答えを模索する重要な手がかりは過去の類似の経験に求められます。

本シンポジウムでは、日本や世界がこれまで経験してきたパンデミックとそれへの対応の事例に立脚し、ポスト・パンデミックの時代をどう生きるかについて考えます。

日時

令和4年10月28日(金) 13:00~16:00(受付:12:30から)

参加方法

ZOOMウェビナーによるオンライン配信

※下記のお申込み用URLもしくはQRコードからご登録をお願いいたします。

お申込方法

お申込みはこちらから

■https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_84tckUmAT2iRU_tY7_fYHg



◀ QRコードからもお申込みいただけます

【お申込み受付期間】2022年10月27日(木)迄

プログラム

司会 岩城 卓二 京都大学人文科学研究所 副所長

開会挨拶

13:00～13:05

時任 宣博 京都大学理事・副学長(研究、評価担当)

報告



13:05～13:45

「ワクチン伝来と近世長崎：感染症、蘭学、近代化」

平岡 隆二 京都大学人文科学研究所 准教授

本報告では、19世紀の日本で流行した天然痘とコレラという2つの感染症に対して、当時の人々がどのように向き合い、またそれらがいかなる社会的影響をおよぼしたかについて考える。具体的には、近世期の長崎を中心とする九州地方において、それらの感染症にまつわる医療や社会的対策がどのように変遷したのかと、その歴史的な背景について探る。



長崎本河内水源地

天然痘は古代から日本でたびたび流行した感染症だが、その予防の決定打となる牛痘ワクチンの接種にはじめて成功したのは1849年、当時オランダとの貿易が唯一認められていた長崎においてだった。それはヨーロッパで牛痘ワクチンが開発されてから約半世紀後にあたるが、成功にいたるまでの経緯とその後の急激な普及には、オランダや中国から渡来する各種情報や、長崎の阿蘭陀通詞と蘭学の伝統、また日本側の学者ネットワークの存在など、多様な背景があった。

また長崎は、最新の感染症が日本へ流入する窓口でもあった。とくに1858年のコレラの大流行は、長崎に来航したアメリカ船に由来し、またたく間に各地に広がり、江戸だけで10万人以上の死者を出したとされる。他方、この大流行は日本の都市に近代的水道が設置される契機ともなった。長崎では1891年に、日本最古の水道専用ダムが完成している。

それらの事例にまつわる史料を手掛かりに、近世から近代への移行期にあたる19世紀を眺めかえし、現在の日本とその未来について考える一助としたい。

Profile

【生年】1974年

【所属・職位】京都大学人文科学研究所・准教授

【著書等】East-West Contacts and Scientific Culture in Early Moder Asia (共編、Special issue of *Historia scientiarum*, vol. 29-1, 2019)、『南蛮系宇宙論の原典的研究』(花書院、2013年)、『新長崎市史：近世編』(分担執筆。長崎市、2012年)。



13:50~14:30

「『公衆』衛生の誕生— —近代日本における伝染病とその啓蒙」

香西 豊子 佛教大学教授

日本の公衆衛生は、国民頼りだという評が聞かれる。だが、そもそも日本において、公衆衛生はいつどのように始まったのか。

幕末期に長崎で、オランダ軍医ポンペが日本の医学生にむけ「健康に関する医学科目(衛生学)」(原語では *gesondheidsleer* (Hygiëne)) を講義したときにはまだ、受講生はその重要性を認識できず、Hygiene が医学に属することすら理解できなかったという。ポンペはときどき学生を連れて長崎市中を散策し、実地で「臭い溝、汚物の山や汚い塵の積もったところ」を示しながら、Hygieneの重要性を説いたのだった。

日本の医学者のなかにも、ヨーロッパで興った、Hygieneという行政に直結する学問領域を、幕末期に紹介した者もいた。開成所の教授・杉田玄端である。彼は、「衆人の健全」を催促・防衛する営み(原語で *openbare gezondheidsleer, of hygiene*)を「公行健全学、即ち「ヒギイネ」と訳し、西洋の最新の動向を伝えた。しかし、Hygieneが「公衆衛生」という名で日本で実施されるようになったのは、その約20年後の明治10年代からである。

いま日本の公衆衛生を考えるにあたり、必要なのは、その特異性の



通俗衛生図解(手洗い)



通俗衛生図解(上下水・害虫駆除)



通俗衛生図解(予防接種・衣類)

歴史的な検証であろう。日本の公衆衛生は、当初より、単純な「欠如」=西洋からの「受容」モデルでは理解できない。その点は、端的に「公衆」衛生という呼称に刻印されている。西洋の言語では、openbar（蘭）やöffentlichen Gesundheitspflege（独）、public health（英）と、「公共の」「公的な」「公開された」等の意味をもつ言葉で形容される活動を、明治期の衛生家らは「公衆」という総称的名詞を冠して言い表した。〈公共空間で展開される衛生〉とは明らかに異質な、〈「公衆」を対象としそれに働きかける衛生〉を創始したのである。

では、明治10年代に始動した日本の「公衆」衛生とは、どのようなものだったか。その背景には、衛生に関して、どのような経験があったか。本報告では、幕末期から明治期に成立した衛生関連の資料を整理しつつ、今日につながる日本の「公衆」衛生の原初的な光景を垣間見る。

Profile

【生年】1973年 【所属・職位】佛教大学社会学部現代社会学科・教授

【研究領域】医学・医療の歴史社会学

【おもな業績】

・『流通する「人体」——献体・献血・臓器提供の歴史』勁草書房、2007年

・『種痘という〈衛生〉——近世日本における予防接種の歴史』東京大学出版会、2019年



14:35~15:15

「コロナ・パンデミックの歴史的 위치——スペイン風邪との比較から」

藤原 辰史 京都大学人文科学研究所 准教授

新型コロナウイルスの世界的な蔓延は、各地に大きな傷跡を残した。突然家族を失った人々、特に対面できないまま亡くなった家族を埋葬した人々の心情は想像を絶する。また、病院でも初期は治療方法が確立されておらず、混乱が起これ、医療従事者の多大な身体的精神的犠牲が払われた。イタリアなどでは救うべき命を選別するという過酷な状況に医療従事者が追い込まれた。

このような悲劇は、これまでの感染症の中でも見られてきたことであつたし、百年前のスペイン風邪でも同様であつた。スペイン風邪は世界で少なくとも四千万人の人々が亡くなったと言われているが、



スペインシュインフルエンザにかかった自画像
(エドヴァルド・ムンク)1919

それは第一次世界大戦の兵士や労働者の移動と密接な関係があった。ウイルスが原因である、ということも突き止められぬまま医者は患者に対応し、現場はやはり大混乱に陥った。

今回のコロナ禍もグローバルなツーリズムの影響もあったし、世界各地の病院も凄まじい闘いを強いられたが、他方で、ロックダウンや経済活動の停止など、事前に政府が大規模な制限をかけたこと、そしてその経済危機が次なる危機としてわたしたちの社会を襲っていることが歴史的に新しいものだと言える(アダム・トゥーズ『世界はコロナとどう闘ったのか?』東洋経済新報社)。この報告では、百年前に起こったパンデミックと現在のコロナ禍について、とくに社会的影響に注目しながら比較検討したい。

Profile

【生年】1976年

【所属・職位】京都大学人文科学研究所准教授。

【近著】『農の原理の史的研究——「農学栄えて農業亡ぶ」再考』(創元社)、『分解の哲学——腐敗と発酵をめぐる思考』(青土社)、『給食の歴史』(岩波新書)、『ナチスのキッチン——「食べること」の環境史』(共和国)など。

総合討論



15:25～15:55

ディスカッサンド 岩城 卓二 京都大学人文科学研究所 副所長

Profile

【生年】1963年

【所属・職位】京都大学人文科学研究所・教授。

【近著】共編著『博物館と文化財の危機』(人文書院、2020年)、共編著『環世界の人文学』(人文書院、2021年)、共編著『論点・日本史学』(ミネルヴァ書房、2022年)

閉会挨拶

15:55～16:00

稲葉 穰 京都大学人文科学研究所長

ZOOM参加にあたって

- Zoomでの動画視聴が可能な方であれば、どなたでもご参加いただけます。
- WEB会議システムZoomを使用してライブ配信します。
- ご参加いただくには、インターネット接続環境があるパソコン、スマートフォン、タブレット端末等が必要です。
- スマートフォン、タブレット等でご参加される場合は事前にZoomアプリのダウンロードが必要です。
- インターネット回線を利用した通信のためインターネット接続料が発生します。
Wi-Fi環境以外での参加にあたっては、通信料にご注意ください。
- お申し込みにあたっては、事前に <http://zoom.us/test> からZoomへの接続性を確認するテストをお勧めします。

お問合せ先

京都大学人文科学研究所総務掛

TEL : (075) 753-6902 (平日10:00～17:00)

Email : annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp



京都大学

